

松戸の里山活動の ココが凄い！！

「つながる」と「支え合う」が育ててきた「みどりの市民力」

緑のネットワーク・まつど副代表／松戸市緑推進委員 高橋盛男

「関さんの森を育む会」を、松戸の里山活動の原点だとすると、すでに20年以上の時が経つ。最近あらたに里山活動に関わり始めた方たちの多くは、その生い立ちを知らないと思われる。そこで、これまで松戸の里山活動がどのように展開してきたのかを少し整理し、ふり返ってみたい。

2000年、一気に動きだした松戸の里やま保全

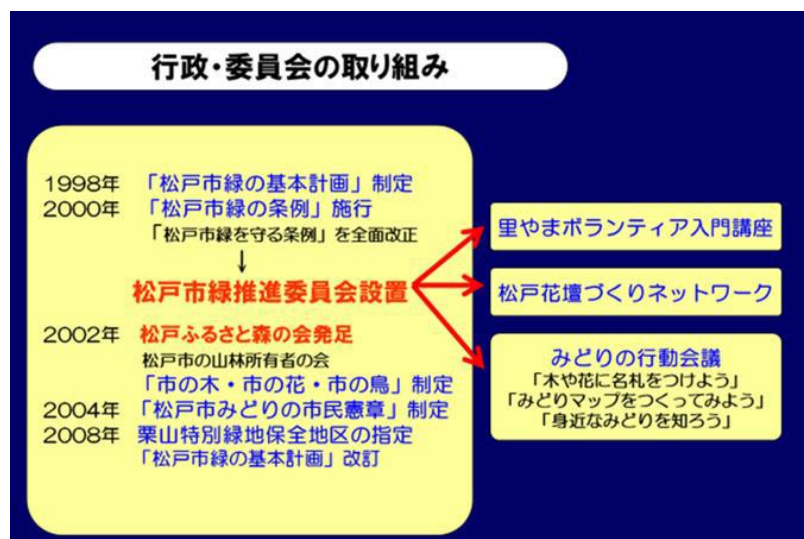
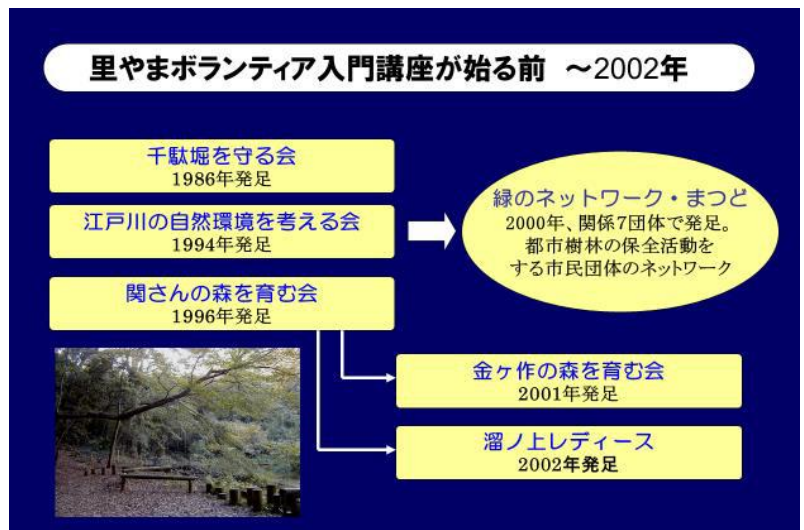
不思議なことなのだが、それまでバラバラだったものが、一気に同じ方向に動き出すことがある。松戸の里山活動でいえば、緑のネットワーク・まつど（緑ネット）が発足した2000年前後がその時期にあたる。

緑ネットが生まれる前、松戸の樹林地（または緑地）保護を目的に掲げて活動していた団体は、4団体ほどしかなかった。発足が古いほうから挙げると「千駄堀を守る会」「江戸川の自然環境を考える会」

「関さんの森を育む会」「松戸の景観を考える実行委員会」となる。

このうち、市民団体が直接に森の管理活動をしているのは「関さんの森を育む会」の1団体のみだった。同会を中心として「千駄堀を守る会」「江戸川の自然環境を考える会」など7団体の参加でスタートしたのが、緑ネットである。背景に、関さんの森にかかわる都市計画道路の問題もあったのだが、松戸の緑をこれ以上減らさず、残していこうというのが発足の目的だった。同じ年に「関さんの森を育む会」の会員有志が「金ヶ作の森を育む会」を発足させる。関さんの森のように、市民が民有林を世話する団体を増やしたい、という思いからだ。金ヶ作の森は現在、里やま応援団・三樹の会が活動している三吉の森である。

一方、当時の行政の動きは、次のようになる。1998年に「松戸市緑の基本計画」が策定され、2000年に全面改定さ



れた「松戸市緑の条例」が施行され、同じ年にこの条例に基づいて「松戸市緑推進委員会」が設置される。また、樹林地や街路樹の保全を主務とする「みどりと花の課」が誕生したのもこの年だ。さらに、2003年には、市内の山林所有者による「ふるさと森の会」も発足する。こんなことを言うと怒られるかもしれないけれど、行政としては、実に素早い施策の遂行である。

そして2003年、緑推進委員会とみどりと花の課の協働開催で「里やまボランティア入門講座」が始まり、第1期の修了者により「里やま応援団 一起の会」が誕生する。こうして、産声をあげて間もない松戸の里山活動がどんどん成長していく。しかし、このようなかたちで入門講座、そして里やま応援団が誕生したことは、当時においては実に画期的なことだった。

画期的な里山活動ネットワークの誕生

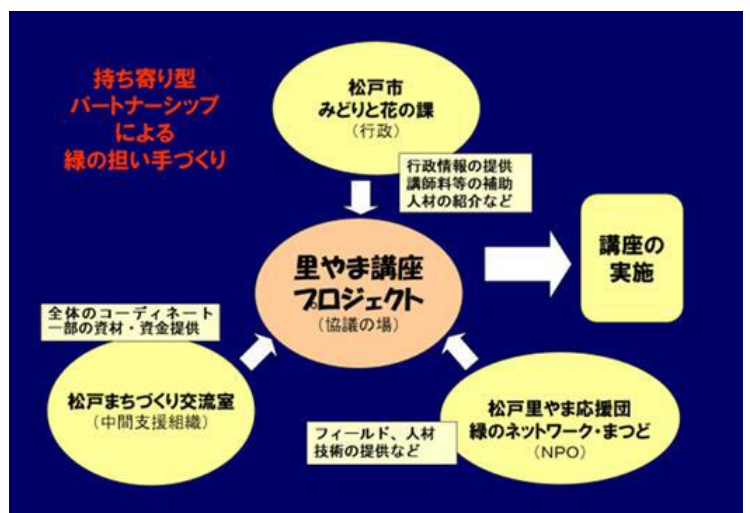
里やま応援団は「ボランティア入門講座」から生まれ、入門講座は緑推進委員会の樹林地部会から生まれた。

当時、第2期にあたる緑推進委員会には、当会の渋谷孝子さんと私が市民公募委員として在籍していた。樹林地部会は、市内の樹林地保全の方策を考える作業グループだ。行政が設置する諮問委員会で、実践をともなう部会活動が展開されるのもあまり例がない。

入門講座のアイデアと基本的な考え方は、渋谷さんによるものだ。それを部会メンバーでたたき上げた。ちなみに、のちにみどりと花の課の課長を務める島村宏之さんが、事務局として部会を担当していた。

今でこそ「市民と行政の協働」とか「官民パートナーシップ」という言葉が、ふつうに聞かれるようになったが、当時は言葉が先行するだけで、実態はなきに等しかった。だが、入門講座の企画と実施については、委員会の部会ということもあり、両者が対等の立場で協議を進めることができた。地味なことのようにだけけれど、画期的なのはこの部分。のちに入門講座を毎年続けて開催していくうえで、この経緯がとても重要な意味を持つ。

委員会と課の共催で始まった講座だが、組織的な立場上、同様のかたちで講座を継続していけないため、翌年からは、3者協働で推進することになった。した右の図にあるのがその運営形態である。今でいう、入門講座の準備会を「協議の場」として、関わる組織がそれぞれの得意とするところを持ち寄り、実施していくかたち。それが今日まで踏襲されているが、これもすごいことだ。



さらに画期的なことがある。2008年に「里やま応援団連絡会」ができたことだ。入門講座の修了者が団体を組織し、それぞれがフィールドを持つようになるのが松戸の里山活動の特色だが、別個に活動する団体同士による緩やかなネットワークができたのだ。当事者たちがどれくらい自覚しているかはわからないが、こういうネットワークが自主的につくられたことが、この国の市民活動のなかではかなり珍しいケースなのである。同じ目的を持つ者が「つながり合うこと」「互いに支え合うこと」が大切だという意識がなければ、こういうネットワークは生まれない。里やま応援団の諸氏が誇りとしてよいところだと思う。

松戸の里山活動のすごさとこれから

行政との連携も含む里山活動ネットワークを基盤として、根木内歴史公園に公園ボランティアが導入され、ステップアップ講座が始まり、「オープンフォレストin松戸」が生まれる。そんな経緯を踏まえると、松戸の里山活動のすごさは次のようなところにあると思う。

1. 活動対象とする森が主に民有林である。
2. オリジナルの入門講座プログラムを持っている。
3. 行政と連携して活動している。
4. 里山活動団体がネットワークを形成している。
5. ネットワークをベースに新たなことに挑んでいる。

これらの中で、都市樹林の保全に限れば、1.の民有林を主な対象にしている里山活動は、全国的に見てもまず例がない。これも、松戸が他に自慢できるところだ。

さて、順風満帆な市民活動など、世の中にもない。多聞にもれず、松戸の里山活動もさまざまな課題を抱えている。このところ、毎期の緑推進委員会で話題になることのひとつに、関連する団体や行政も含め、ここまで広まりをみせている里山活動を包括的に把握でき、相互に支援し合えるような仕組みが、里山活動の安定した継続に必要なのではないかというものがある。今、松戸市は「松戸市緑の基本計画」の改訂作業を進めているが、上記のような仕組みづくりを進める手がかりを探るため、委員会内に「みどりのサロン部会」を立ち上げた。

どういう仕組みが好ましいのか、またそれを運用する体制をどうするかも、まだ五里霧中だ。だが、差し当たって、策定中の緑の基本計画に対して意見をいただくようなところから、里山活動の当事者として基本計画の策定に関わってもらえないかと検討している。

松戸の里山活動のおいたちや特徴・素晴らしい点などを再認識できたらと、また上記のような取り組みが始まっていることから、今回本紙の特集として松戸の里やま活動をふりかえってみた。松戸の緑を愛する皆さまに、ぜひご助力いただき、緑の基本計画をより進化したものにできればと期待している。